

各 関 係 機 関 の 長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和 7 年度 技術情報第 11 号(イチゴのヒラズハナアザミウマの殺虫効果試験)について (送付)

イチゴのヒラズハナアザミウマに対する主要農薬の殺虫効果について、下記のとおり取りまとめましたので、周知およびご指導をよろしくお願いいたします。

なお、本情報は、病虫害防除所ホームページ (<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosho/index.html>) にも掲載しています。



令和 7 年度 技術情報第 11 号

イチゴではヒラズハナアザミウマが多くのは場で発生し、本虫による被害は、品質低下(図 1)を招くことから防除の徹底が必要です。

イチゴで用いる主要農薬について殺虫効果を調査しましたので、防除指導の参考にしてください。

- 1 対象作物 イチゴ
- 2 対象病虫害 ヒラズハナアザミウマ
- 3 供試虫 日置市伊集院町(伊集院個体群)および志布志市有明町(有明個体群)の施設イチゴで採集し、累代飼育した個体群(成虫)

4 殺虫効果試験の結果と注意事項

1) 試験結果

- (1) ヒラズハナアザミウマ成虫に対し、7 剤の殺虫効果試験を行った結果、放飼 72 時間後に両個体群で死亡率 80%以上となった農薬は、スピノエース顆粒水和剤、ディアナ SC の 2 剤であった。グレースシア乳剤およびファインセーブフロアブルは伊集院個体群では効果が高かったが、有明個体群では効果がやや低く、効果に差がみられた(表 1)。
- (2) なお、ヒラズハナアザミウマ幼虫に対しては未試験である。

2) 注意事項

- (1) 供試した農薬はアザミウマ類に登録(令和 7 年 7 月 14 日現在)があるものの、使用前には必ずラベル等を確認し、使用基準を遵守する。
- (2) は場の農薬散布状況によって殺虫効果は異なることが予想される。散布後は効果を確認する。
- (3) 農薬の効果は、アザミウマの種により異なるので注意する。

5 調査結果

表1 各種農薬のヒラズハナアザミウマ成虫に対する殺虫効果（令和7年，室内試験）

供試農薬名	RAC コード	系統	希釈 倍数	殺虫効果 ¹⁾					
				伊集院個体群 ^{a)}			有明個体群 ^{b)}		
				24h	48h	72h	24h	48h	72h
スピノエース顆粒水和剤	5	スピノシ	5000	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ディアナSC	5	スピノシ	2500	◎	◎	◎	◎	◎	◎
モベントフロアブル	23	テトロン酸および テトラミシ誘導体	2000	×	×	△	×	×	×
ベネビアOD	28	ジアミド	2000	×	△	○	×	×	×
グレースシア乳剤	30	イソキサゾリン	2000	◎	◎	◎	○	○	○
ファインセーブフロアブル	34	フロマトキン	1000	△	△	◎	×	×	△
プレオフロアブル	UN	ピリタリル	1000	×	△	△	×	×	×
無処理区（死亡率）	—	—	—	0.0	3.3	6.4	0.0	0.0	0.0

1) 殺虫効果：放飼72時間後の補正死亡率を×：0～30%未満，△：30～60%未満，○：60～80%未満，◎：80%以上で示す

2) 試験方法

供試虫：令和7年4月16日に日置市伊集院町，4月15日に志布志市有明町の施設イチゴほ場から採集し，ソラマメ催芽種子で累代飼育した個体群（成虫）

検定日：a）令和7年6月6～8日，b）同年7月3～5日

検定法：所定倍数で希釈した薬液にインゲン葉（品種：つるなしモロッコ）を30秒間浸漬して風乾した。その後，処理葉をマンジャーセルに置き，成虫を10～11頭放飼し，3反復で検定した。マンジャーセルはプラスチック容器に入れ，25℃設定の室内に静置した

展着剤：ベタリンA（5,000倍）を加用

補正死亡率：3反復の死亡率の平均値を用いて， $\{ (処理区死亡率 - 無処理死亡率) / (100 - 無処理死亡率) \} \times 100$ で算出



図1 ヒラズハナアザミウマのイチゴ花および果実の被害